

# 琉球大学学術リポジトリ

## 教職希望学生が認知する教師適性と教師効力感

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 公開日: 2008-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前原, 武子, 稲谷, 心み枝, 金城, 育子, Maehara, Takeko, Inatani, Fumie, Kinjo, Ikuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/8154">http://hdl.handle.net/20.500.12000/8154</a>

## 教職希望学生が認知する教師適性と教師効力感

前原 武子\* 稲谷ふみ枝\*\* 金城 育子\*\*\*

(1996年9月30日受理)

教職希望学生が教師の適性をどう認知するのか、その適性を自分がどれほど保有していると認識するのか、そして、どのような自己特性が、将来の教師像としての教師効力感につながるのか検討した。その結果、教師の適性として認知される対人関係能力と、運動能力(男子)、勤勉さ(女子)を自己の特性として認識することが教師効力感につながることを見出した。

### 背景と目的

子どもの個性を生かす教育の必要性が叫ばれているが、教師の個性は教師の資質として重要であろうか。

われわれがそのような疑問をもった理由は、先の研究結果にある。前原・金城(1996)は、教職を希望する学生を対象に、自己のどの側面が将来の有能な教師としての自己像につながるのか検討した。その結果、男女学生が、対人・知的側面と責任感に関する自己評価が教師効力感(teaching efficacy)に正の影響をもつものの、加えて、女子学生においては、個性的な生き方の側面が教師効力感に負の影響をもつことが明らかにされた。そして、その結果は、彼らが過去に個性を生かす教育を受けてきたという実感をもてなかったり、獲得された女性役割により、個性的であることが女性教師の資質として認識できなかったりすることからくるのではないかと推測されたのであった。

はたして、教職を希望する女子学生は、個性的である自己の特性を教師の資質として認知していないのだろうか。もしそうなら、彼らは将来、個性教育を効果的に実践することに困難をきたすことになるだろう。個性教育の重要性が

強調される中で、女子学生に対する教員養成のあり方も課題となる。そこで、本研究は、先にわれわれが見出した教師効力感と自己評価の関連性を再確認し、さらに教職希望学生が、望ましい教師としての資質をどう考えているのか検討することを主な目的とする。

教師の資質として、効果的な学習指導や学級経営などの実務的な能力が重要であることはいうまでもない。そのような実務能力は客観的に査定されることもあろうが、教師自身が予期する教育実践に関する自己効力(教師実務を効果的に遂行するために自分は努力を払うことができるという予期、ここでは教師効力感と呼ぶ)によっても理解される。教師効力感の予測妥当性については、Woolfolk and Hoy(1990)によって検討されてきた。われわれ(前原・金城, 1996)は、教職を希望する学生を対象に、将来の自己像としての教師効力感をとりあげ、それに及ぼす自己評価特性を明らかにしたのであった。その結果から、彼らが認知する教師資質の特徴を推測することができる。すなわち、対人・知的能力と責任感を高く自己評価することが教師効力感を高めるといふ、その結果は、それら特性が教師の適性として認知されていることを

\*琉球大学教育学部

\*\*琉球大学大学院教育学研究科

\*\*\*琉球大学教育学部非常勤講師

示唆している。また、個性的である自己の特性が教師効力感を低下させるということは、彼らはその特性を教師の適性として重要視していないことを示唆するものである。彼らは、過去の学校関連経験をもとに優れた教師の特性について認識し、その特性を自分が有していることを認識し、したがって、高い教師効力感をもつことができたはずだ。その推測の妥当性を検討し、教職希望学生が認知する教師適性の特徴を明らかにするためには、彼らが自己の諸側面をどう評価するのか吟味する必要がある。

自己評価尺度は、これまでいくつか考案されている（たとえば、Harter, 1988）が、認知された教師資質との関係を検討するためには、自己特性と教師適性を同じ次元で測定できる尺度の作成から出発する必要がある。井上（1989）は、教員養成系大学生が自己のパーソナリティをどのようにとらえているか、また教師として望ましいパーソナリティについて彼らがどうとらえているかを調べ、両者に若干の相違があることを明らかにした。しかし、両者の関係については検討されなかった。本研究では、まず、自己評価尺度と、それに対応する認知された教師適性尺度を作成する。そうすることによって、教師効力感に貢献する自己特性が、教師適性として認知されたものであることを確認することができよう。

## 方 法

被験者 R国立大学学生379名（男子157名、女子222名）。教育学部197名、法文学部92名、理学部93名からなる。2年生対象教職科目「教育心理学」の講義オリエンテーション時に参加した者。

教師効力感の測定 Woolfolk & Hoy（1990）による教師効力感尺度のうち教師一般の力量に関する項目を除いた個人の教育実践効力感に関する12項目。それは、すでに前原（1994）、前原・金城（1996）によって吟味、採用されてきたものであり、「教職について最初の1、2

年の自分を予想して下さい」の教示のもとで評定が求められた。

自己評価の測定 前原・金城（1996）で使用された28項目に修正、追加した51項目。そのうち、因子分析の結果、解釈可能な7因子を抽出し、各因子の負荷量が高い40項目を採用した。各項目に「あなた自身どのくらいあてはまるか」の質問によって評定が求められた。

認知された教師適性の測定 自己評価尺度と同一の項目について、「教師としてどれくらい重要であるか」について評定を求めた。そのうち、因子分析の結果、自己評価尺度と同一の7因子に含まれる項目を採用した。

いずれの尺度も、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5点評定により測定された。

## 結 果

自己評価尺度および認知された教師適性尺度の各40項目についてあらためて因子分析（バリマックス、直交回転）を行った結果を、表1に示す。自己評価に関しては、第1因子が、社交性に優れる、人とのつきあいが方がうまいなどの項目に高い負荷量が見られることから、「対人関係の因子」と命名できる。第2因子は、父親や母親など家族の側面に負荷が高いことから「家族因子」と命名する。第3因子は、まじめ、勤勉などを含む「勤勉因子」、第4因子は、運動神経や体力などを含む「運動因子」、そして第5因子は、個性的な生き方や自分らしさへのこだわりなどを含む「個性因子」として命名できる。さらに、第6因子はおしゃれや服装のセンスなど「スタイル因子」、そして第7因子は「知的能力因子」として命名することができる。それら7つの因子での説明力は53.11%であった。

それらの因子は、認知された教師適性尺度では抽出順序に違いがみられ、表2に示すとおり、第1因子が「家族」、第2因子が「勤勉」、第3因子が「対人関係」、第4因子から第7因子

表 1. 自己評価尺度の因子分析

	F1 対人	F2 家族	F3 勤勉	F4 運動	F5 個性	F6 スタイル	F7 知的
社交性に優れている	.74						
人とのつきあいがうまい	.73						
親しい友人が多い	.61						
気さくである	.57						
異性と気楽に話せる	.55						
ユーモアがある	.53						(-.32)
異なる年齢の相手と気楽に話せる	.52						
大きな声で話しができる	.50						
他人から信頼される	.46		(-.41)				
感情をコントロールできる	.33						
自分の父親を大切に思う		- .85					
自分の母親を大切に思う		- .77					
自分の父親を自慢に思う		- .73					
自分の家族に満足している		- .72					
自分の母親を自慢に思う		- .71					
まじめである			- .73				
勤勉性			- .73				
責任感がある			- .61				
社会の規範を守る			- .60				
きちょうめんである			- .55				
自分に厳しい			- .55				
道徳的である			- .50				
運動神経が発達している				- .75			
体力に自信がある				- .72			
得意なスポーツがある				- .70			
短距離走が速い				- .64			
マラソンが得意				- .51			
個性的な生き方					- .74		
熱中できる趣味がある					- .61		
自分らしさへのこだわりがある					- .61		
自慢に思える特技がある					- .55		
自分の生き方に満足している					- .52		
自己主張ができる	(.42)				- .51		
服装のセンスがよい						.89	
おしゃれが上手						.87	
スタイルがよい						.49	(-.35)
目鼻立ちがよい						.47	(-.36)
頭の回転が早い							- .67
ものごとをよく知っている							- .61
頭がよい							- .56
寄与率 (%)	10.37	8.41	8.17	7.51	7.05	6.61	4.98
累積寄与率 (%)	10.37	18.78	26.96	34.46	41.51	48.13	53.11

表 2. 教師評価尺度の因子分析

	F1 対人	F2 家族	F3 勤勉	F4 運動	F5 個性	F6 スタイル	F7 知的
社交性に優れている	.52						
人とのつきあいがうまい	.56						
親しい友人が多い	.45	(.39)					
気さくである	.42						
異性と気楽に話せる	.47						
ユーモアがある	.54						
異なる年齢の相手と気楽に話せる	.47						
大きな声で話しができる	.42		(-.37)				
他人から信頼される	.35						
感情をコントロールできる	.38		(-.31)				
自分の父親を大切に思う		.87					
自分の母親を大切に思う		.90					
自分の父親を自慢に思う		.69					
自分の家族に満足している		.67					
自分の母親を自慢に思う		.86					
まじめである			-.62				
勤勉性			-.65				
責任感がある	(.37)		-.49				
社会の規範を守る			-.48				
きちょうめんである			-.62				
自分に厳しい			-.61				
道徳的である			-.42				
運動神経が発達している				.69			
体力に自信がある				.52			
得意なスポーツがある				.62			
短距離走が速い				.67			
マラソンが得意				.53			
個性的な生き方					-.73		
熱中できる趣味がある					-.47		
自分らしさへのこだわりがある					-.65		
自慢に思える特技がある					-.58		
自分の生き方に満足している		(.30)			-.38		
自己主張ができる					-.32		
服装のセンスがよい				(.37)		-.27	
おしゃれが上手						-.56	
スタイルがよい						-.81	
目鼻立ちがよい						-.80	
頭の回転が早い							-.58
ものごとをよく知っている							-.63
頭がよい			(-.30)				-.52
寄与率 (%)	7.33	10.82	7.35	6.72	5.23	5.38	4.64
累積寄与率 (%)	7.33	18.15	25.51	32.23	37.46	42.83	47.47

表3 教師効力感を目的変数とした重回帰分析

男子	標準偏回帰係数	F値
対人	0.25	6.08 *
家族	0.07	0.87
責任	0.07	0.62
運動	0.19	4.13 *
個性	0.16	3.00 +
スタイル	-0.03	0.12
知的	-0.03	0.14

女子	標準偏回帰係数	F値
対人	0.20	5.72 *
家族	0.06	0.70
責任	0.19	8.09 * *
運動	0.01	0.03
個性	0.10	1.80
スタイル	0.04	0.30
知的	0.11	2.03

+p<.1 \*p<.05 \*\*p<.01

がそれぞれ「運動」, 「スタイル」, 「個性」, 「知的能力」であった。それら7因子による説明力は47.47%であった。

自己評価および教師適性の各因子に含まれる項目の平均得点を示したものが図1と図2である。自己評価に関しては, 「個性」(t=5.53), 「対人関係」(t=2.51), 「勤勉」(t=2.65), 「運動」(t=6.79), 「スタイル」(t=2.60), 「知的能力」(t=6.64), いずれの側面も男子が女子より有意(p<.01)に得点が高かった。認知された教師適性に関しては, 「勤勉」だけが有意に女子>男子(t=3.45, p<.01)であった。因子間の平均値をみると, 自己評価も認知された教師適性も, 男女ともに「対人関係」, 「勤勉」, 「知的」が上位にあり, 次いで「個性」が上位にあった。

表3は, 性別に, 教師効力感を目的変数, 自己評価を説明変数として重回帰分析を行った結果である。予想に反し, 女子においても, 「個性」的であることが教師効力感に否定的影響力

表4 自己評価と認知された教師適性との相関(上段男子、下段女子)

		認知された教師適性						
		対人	家族	勤勉	運動	個性	スタイル	知的
対人	男子	0.38	0.25	0.24	0.31	0.27	0.19	0.20
	女子	0.32	0.22	0.16	0.17	0.20	-0.02	0.12
家族	男子	0.24	0.52	0.09	0.04	0.06	-0.03	0.07
	女子	0.22	0.44	0.11	0.14	0.20	0.03	0.14
勤勉	男子	0.27	0.11	0.49	0.19	0.22	0.16	0.24
	女子	0.22	0.16	0.29	0.12	0.15	0.06	0.14
運動	男子	0.24	0.20	0.25	0.42	0.34	0.23	0.30
	女子	0.23	0.12	0.18	0.31	0.16	0.01	0.00
個性	男子	0.22	0.17	0.25	0.20	0.36	0.18	0.21
	女子	0.17	0.20	0.05	0.08	0.29	-0.03	-0.06
スタイル	男子	0.19	0.12	0.02	0.35	0.28	0.40	0.24
	女子	0.17	-0.01	0.11	0.17	0.07	0.15	0.14
知的	男子	0.27	0.09	0.29	0.23	0.08	0.22	0.31
	女子	0.23	0.08	0.17	0.14	0.10	0.18	0.26

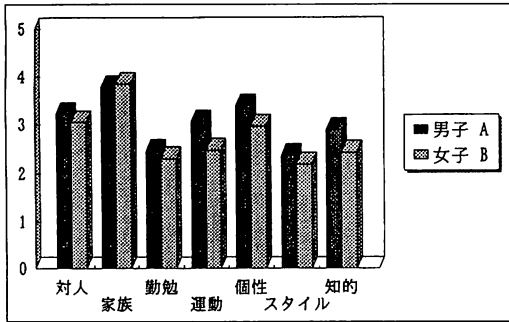


Fig. 1 自己評価

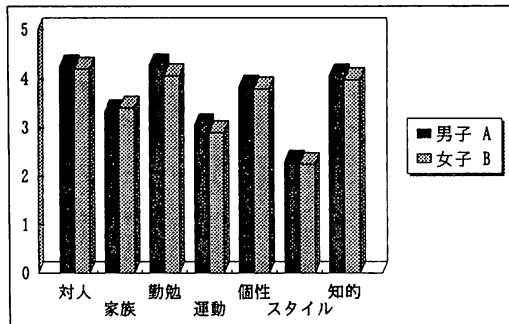


Fig. 2 認知された教師適性

をもつという結果は得られなかった。女子においては、「対人関係」と「勤勉」が、また男子においては、「対人関係」と「運動能力」が、教師効力感に肯定的な影響力をもつことが明かである。男子における「運動能力」の効果は、先行研究ではみられなかった結果である。

表4は、自己評価と認知された教師適性との相関を性別に示したものである。認知された教師適性の側面とその側面の自己評価が高い相関関係にあることが分かる。

### 考 察

本研究は、教職希望学生が、性の違いによらず、教師の適性として対人関係、勤勉さ、知的能力に次いで個性を重要視していることを見出した。教師の仕事が多岐にわたることを考慮すれば、教師の資質も多面的に検討すべきであることはいうまでもない。これまで、異なる視点から検討が試みられてきた(井上, 1990)。

しかし、本研究は、教職希望の女子学生が自己を個性的であると認識するほど教師効力感の低下を示すとの先行研究(前原・金城, 1996)結果から出発したため、彼らが教師の資質として個性を低く見積もるのではないかという予想を確認することに主な関心をおいた。しかしながら、得られた結果は予想に反するものであった。教師適性すべての認知に性差がないばかりか、先行研究と異なり、個性が教師効力感に否定的影響をもつことも確認されなかった。その結果をどう解釈すればいいのだろうか。先行研究の資料収集は1992年4月であり、本研究の調査実施は1996年10月であったが、その4年半の間に、その予想を覆す何があったのだろうか。たしかに、その間、学校では個性教育の重要性が強調され、家庭でも子どもの個性を重視する風潮が続いてきた。その効果が本研究結果に反映されたのだろうか。いずれにせよ、もはや、個性的である女子学生の教師としての将来像に特別の暗雲はなさそうだ。しかしながら、男女ともに、個性的であることの自己評価と教師資質として個性を重視する度合いの間に正の相関がありながら、個性的であることが教師効力感に肯定的影響力を示さなかったことは、今後の個性教育にとって明るい材料とはいえない。

一方、女子学生も、男子学生と同程度に、将来教師としての実務を有能にこなすことができるという教師効力感をもっていた。その背景には、彼らが、教師として重要な資質と思われる特性を自分自身が有しているという認識があった。特に対人関係に関する自己評価が高いほど教師効力感が高いという結果は、対人関係に関する自己評価と認知された教師適性との正の相関係数から、教師の重要な資質である対人関係能力を自分が有しているとの認識によるものであるといえる。また、男子においては運動能力に関する自己評価が、女子においては勤勉さに関する自己評価が教師効力感に影響するという結果は、その特性が教師の適性として認知され、その特性を自分が有していることを認識しているからであることが、両者の相関係数から分か

る。

本研究は、教師の資質として、特に対人関係の重要性を見出した。それは、異なる研究領域における報告（畠瀬，1980，1981；田崎，1984）と同じ方向にある。

### 引用文献

Harter, S. 1988 Manual for the self-perception profile for adolescents. Univ. of Denver.

畠瀬 稔 1980 エンカウンター・グループ経験による教師の対人能力の促進に関する研究（Ⅰ），日本心理学会第44会，第45会大会発表論文集，642。

畠瀬 稔 1981 エンカウンター・グループ経験による教師の対人能力の促進に関する研究（Ⅱ），日本心理学会第45会大会発表論文集，657。

井上正明 1989 教員養成系大学生からみた

教師のパーソナリティ特性の評価 福岡教育大学紀要，38-4，135-150。

井上正明 1990 教師の資質・力量の評価に関する調査研究〔Ⅱ〕—本学学生からみた教師としての資質・力量の在り方を中心に— 福岡教育大学紀要，39-4，201-215。

前原武子 1994 教師の効力感と教師モラル，教師ストレス，琉球大学教育学部紀要，44-2，333-342。

前原武子・金城育子 1996 教師希望学生の教師としての可能自己 琉球大学法文学部紀要—ヒューマンサイエンス，第号別冊，133-146。

田崎敏昭 1984 教師の勢力資源と児童のモラル 佐賀大学教育学部研究論文集，31(2)、147-163。

Woolfolk, A. and Hoy, W. 1990 Prospective teachers' sense of efficacy and Beliefs about control. *Journal of Educational Psychology*, 82, 81-91.